

施設で叶える自己選択

～私が私であるために～

施設名：介護老人保健施設 白川園

発表者：福田 葵

【はじめに】

今回、独居生活から介護老人保健施設へ入所となった事例を担当した。面接から目標を設定し、意味のある作業に焦点を当て、アプローチを行った。日々の活動提供に自己選択ボードを使用した関わりを多職種協働にて実施し、役割の再獲得や満足度の向上が得られたため、ここに報告する。

【事例紹介】

H氏 90代女性 要介護2

障害高齢者日常生活自立度 B1

診断名：慢性心不全・大動脈弁狭窄・胸水・貧血症
性格：話好き・社交的

生活歴：約60年間理容師として働く。夫の他界後より独居生活となるも、転倒や低栄養状態が続き、当施設へ入所となる。

<評価>

入所時の状況：心機能の低下による生活空間の狭小化から情緒不安定となる。
：食事摂取量の低下・深夜覚醒が増加する。

面接：本人が大切にしている事やその意味などを具体的に聴取した。そこから、
・オセロゲームがしたい：友人から習って、とても楽しかったから続けたい。
・栄養を摂りたい：栄養が摂れたら家族も安心するし出来る事が増えると思う。
・ボランティアをしたい：これまでたくさんの方にお世話になった。だから、今度は私が出来る事で恩返しをしたい。
・日記を書きたい：当たり前に使っていた文字や日々の出来事を忘れたくない。

※各項目の満足度は5段階の1～2であった。

心機能：NYHA（心機能）分類 II度

A D L：F I M 90 / 126点

認知機能：H D S - R 21 / 30点

【目標設定】

生きがいを見つけ、生活の充実化を図る

- 1 自分の意思を文字や言葉で伝える事が出来る
- 2 食事摂取量の向上・栄養状態の改善
- 3 社会的貢献による活動能力向上

【介入計画】(H28年7月12日～10月14日)

- 1 自己選択ボードを使用し、やりたい活動を行う
また、日記にて自らの不安や考えの整理をする
- 2 管理栄養士にて嗜好調査や面談、食事摂取量の確認を行う
- 3 施設行事時に職業歴を活かした関わりを行う
：整容や手洗い時など、生活場面での立位動作練習を行うほか、環境設定や車椅子操作の獲得

【結果】(変化のあった項目のみ記載)

面接 ※満足度を5段階で記載

作業ニーズ	初期満足度	介入後
オセロゲーム	1 / 5	3 / 5
栄養を摂りたい	2 / 5	4 / 5
ボランティア	1 / 5	4 / 5
日記を毎日書く	1 / 5	3 / 5

A D L：F I M 108 / 126点

認知機能：H D S - R 28 / 30点

貧血の改善（内服は中止となる）

【考察】

介入には、本人の想いから目標を一緒に設定するという作業自体が大きな役割を担ったと考える。また、そこに本人の能力に応じた作業活動を具体的に計画する事で、見えない不安感から解放され、目標がより身近に感じる事が出来たのではないかと推察される。更に、1日のスケジュールを組む作業には、遊びの感覚や意思表示のしやすさが含まれる手段を用いた。これらの関わりが、本人の意思を動かす第一歩になったと考える。そして、やりたい活動に快刺激を積み重ねる事で、自ら活動へ積極的に参加するようになり、内に向いていた感情に様々な変化がみられた。それらが視野の拡がりや安心感を生み、自己効力感の向上に繋がったと考える。

【まとめ】

今回、利用者の想いと向き合う重要性を学んだ事はもちろん、利用者があげる目標の一つ一つにその人のストーリーがあると認識できた。今後も、多職種が一丸となって利用者の生きがいを支援していきたい。

Re ZAITAKU

～当施設における在宅復帰への取り組みとそこから見えてきたもの～

施設名：介護老人保健施設アルカディア
発表者：三砂健一 平良綾子 運天里恵

【はじめに】

当施設では、H27年度より「在宅復帰」に力を入れ取り組んできた。そのひとつとして、他部署との兼任であったセラピストを専属とすることで他職種との連携強化や短期集中リハの充実を図り、在宅復帰率の向上がみられたため、事例の紹介と合わせ報告する。

【方法】

- ①H27年1～3月とH28年1～3月で、短期集中リハ回数と在宅復帰率を比較。その相関関係を証明。
- ②介護職、看護職、マネジメント職（以下、マネ職）に、在宅復帰された事例についてアンケートを実施し、当時の関わり方や意識の変化を調査。
- ③アンケートを実施した事例の妻へ、各時期での心境を聞き取り調査。

【アンケート事例紹介】

Y・T様 60代 男性 H26年に脳梗塞を発症。
H27. 6/22 当施設に入所。（不安期）
H27. 9/30 自宅での介護に不安が残り、有料老人ホーム（以下、有料）へ入所。（有料選択期）
H27. 11/17 有料での生活に満足できず、当施設へ再入所し、在宅復帰支援を開始。（決意期）
H28. 3/10 介護への不安を持つ妻に対し介護指導を行い、自宅での生活を再開。（奮闘期）

【結果】

- ①短期集中リハ回数-在宅復帰率
H27年1～3月の平均 68.3回-5.7%
H28年1～3月の平均 158.3回-46.6%
短期集中リハ回数と在宅復帰率の相関係数 0.91
※0.7以上で有意に相関が認められる
- ②アンケート結果（回答率73.0%）
 - ・事例の在宅復帰に向け本人や家族に対し、意識して取り組んだことはありますか？
Yes：介護職68.8% 看護職50% マネ職100%
 - ・在宅復帰の方が増えていることで、利用者との関わり方や意識の変化はありますか？
Yes：介護職87.5% 看護職75% マネ職100%
- ③妻の心境変化
 - ・不安期：どうしていいのかわからない。

- ・有料選択期：施設が決まって一安心できる。
- ・決意期：自宅で介護したほうがいいのでは。
- ・奮闘期：頑張ってみよう！

【考察】

H27年7月よりセラピストを専属としたことで、短期集中リハ回数の増加が可能となり在宅復帰率の向上に繋がった。これは、専属となったことで、福祉用具の調整や介助方法の検討などが行え、他職種との相談も進めやすくなったことが要因と考えられる。結果①からも短期集中リハ回数と在宅復帰率の相関が認められた。

また、結果②より各職種とも在宅復帰に対する意識の変化があることが分かった。しかし、その意識には職種毎に差があり、意思疎通が不十分であることも明らかになった。今回紹介した事例では、決意期～奮闘期に職種間の意識の差が徐々に埋まり、各職種が取り組むことで自宅退所を果たすことができた。早い段階より意識の統一ができていれば、より家族の想いを尊重して応えられたのではないかと、本事例より学ばせていただくことは多くあった。

安心して在宅復帰を果たすためには、各職種間の連携と、利用者、家族を中心としたサービス提供を意識することが重要であり、それが可能となる環境の構築が今後の課題として考えられる。

【まとめ】

今回、在宅復帰の取り組みを振り返るなかで、取り組みがしっかりと結果にコミットされていることが分かった。その反面、職種間での意識の統一が不十分という課題もみえてきた。本人、家族の不安や希望に寄り添い、想いに応えられるサービスが提供できるよう、各スタッフが意識を高め取り組んでいきたい。

今回紹介した事例の妻は退所後に、「自宅での介護生活に不安はあるが、孫に囲まれた時に時折和らぐ夫の表情を見て、連れて帰って良かったと思う。」と話されている。

住み慣れた、思い出あふれる地域で一人でも多くの方が生活を再開できるよう、これからも Re ZAITAKU（在宅復帰）を支援していきたい。

ハッカで楽々ごっくん

～安全な経口摂取維持への取り組み～

施設名：信成苑

発表者：島袋花子 宮里麻莉

山内和雄 岩崎幸子

大城亮子 川上喜広

【はじめに】

○摂食・嚥下障害は、誤嚥性肺炎のリスクを高めるだけでなく、栄養・全身状態にも影響する。また、認知機能低下に伴い、嚥下障害が更に悪化し、食事量の低下や介助量増加につながる場合も多い。そこで、我々はハッカに含まれるメントールの嚥下促通効果に注目した。嚥下訓練で行われるアイスマッサージなどの冷刺激は、咽頭の感受性を高め、嚥下反射を短縮すると考えられている。海老原ら(2006)は、メントールが温度感受性 TRPM8 受容体を急性刺激し、嚥下反射が速くなることを報告している。今回、当施設における、安全な経口摂取維持を目的とした取り組みの経過を報告する。

【目的】

摂食・嚥下障害の入所者に対し、ハッカに含まれるメントールの嚥下促通効果を利用し、食事や水分摂取時の誤嚥予防を図る。

【対象】

6名（男性4名、女性2名）
年齢：平均 85.83 歳(95-68)、疾患名：認知症・脳血管障害・神経系疾患等、平均介護度：要介護5、平均 BMI：18.1、誤嚥性肺炎の既往3名あり。全対象者が食形態トロミ食(嚥下食Ⅲレベル)、水分中間トロミを摂取。経口摂取方法は全介助～一部介助となっている。

【期間】

平成 27 年 12 月～平成 29 年 1 月

【方法】

ハッカトロミの作り方：水 100ml、砂糖 3g、レモン 3g、トロミ剤 2.5g、ハッカ油 0.1ml トロミ濃度は中間トロミ約 2%、実施頻度は 1 日 2 回、①昼食直前、②15 時(食間)の水分おやつタイムの直前に、10ml(小スプーン 2 杯)を介助にて摂取した。そして、食事の状況・食事摂取量を記録し、栄養状態の経過を追う為、毎月の体重測定、取り組み開始から 3 ヶ月後と 6 ヶ月後に血液検査を行

い、Alb 値を確認した。

【結果】

取り組み開始から、食事中的ムセ等の誤嚥所見が減少した。A 氏・C 氏は、食物の口腔内ため込が減少し、食事時間が 30 分以上から 20 分程度に短縮した。取り組み期間中、対象者の全身状態は概ね安定、誤嚥性肺炎の発症はなかった。また、栄養面に関して、取組前 Alb 値が 3 以下であった A 氏・B 氏については、食事摂取量が増加し、BMI と Alb 値を維持している。F 氏について、食事摂取量は維持しているが、Alb 値の低下を認めた。D 氏は 6 ヶ月間取り組みを継続したが、認知症悪化の為、入院となった。

【考察】

食事開始前、ハッカに含まれるメントールの効果により嚥下反射が促通され、ハッカトロミ 10ml を嚥下することが直接的嚥下訓練としての役割を果たし、食事中的誤嚥が減少したと考えられる。また、嚥下機能を維持することにより、食事摂取量が安定し、栄養状態も維持・改善することができた。対象者 A 氏・C 氏は、食事時間が短縮し、介助負担の軽減につながったと考えられる。F 氏については、誤嚥性肺炎の予防はできているが、認知機能と活動性の低下に伴い、栄養状態が少しずつ低下している。誤嚥予防の取り組みは継続し、栄養状態を維持するために食事内容の見直しも必要と考え、現在栄養面のアプローチも実施している。

【まとめ】

今回、身近な食品でも、摂食・嚥下障害がある入所者の誤嚥予防に有効であると示された。この取り組みは、覚醒・認知機能低下、随意運動が困難な利用者に対しても実施が可能である。現在、今回の対象者に加え、計 9 名の利用者に対し、ハッカトロミの摂取を継続している。

今後、長期的な経過や効果から、アプローチを再検討し、利用者の安全な経口摂取維持を目標に支援していきたいと思う。

手工芸から手貢献へ！

～それぞれが今できること～

施設名：西原敬愛園 通所リハビリ

発表者：介護士 糸数 幸江

【はじめに】

これまで通所リハビリでの手工芸の目的は、主に趣味活動と手指リハビリの一貫として行っていた。それは個々によって異なる作品作りで、多くの利用者様はやる事がなく、時間を持て余している様子がみられた。今回手工芸からのステップアップとして、利用者様一人一人が作った作品を地域へ貢献出来ないか？との提案で取り組みを行った。結果として良い成果が得られたので報告する。

【取り組みの目的】

- ・多くの利用者様が同じ目的に向かって作業を行う
- ・利用者様同士の交流
- ・心身の活性化と意欲向上
- ・製作する喜びと共に、地域への貢献活動に繋げる

【取り組んだ内容】

① 雑巾 お手玉作り

職員の提案により、古くなったタオルやハギレをリサイクルとして活用し、製作する

製作期間（平成27年8月～平成28年5月）

参加者 女性利用者様 12名

雑巾 100枚 お手玉 50個 製作

平成27年12月 西原南小学校へ雑巾 50枚寄贈

平成28年1月 坂田保育所へお手玉 50個寄贈

平成28年5月 事業所内保育園へ雑巾 50枚寄贈

② 千羽鶴 ビーズのお守り作り

眼の不自由な80代女性利用者T様とリハビリスタッフとの想いから活動を行う。

生活リハビリとして鶴を折っている時に、「誰か渡したい人はいますか？」とスタッフが尋ねるとすぐに、「熊本の人に届けたい」と話していた。T様は目は不自由だが耳はしっかりしていて、毎日テレビやラジオから熊本地震の情報を聞いてとても気にかけており、「熊本に贈りたい」「この鶴を飛ばして一人一人救ってほしい」「鶴が羽ばたいて皆を救ってほしい」とのT様の想いを聞き、多くの利用者様も賛同し製作をする

製作期間（平成28年4月～平成28年6月）

参加者 女性利用者様 23名

1000羽鶴 お守り 38個製作

平成28年6月 介護老人保健施設 コスモピア
熊本にT様の想いが記された手紙と共に郵送。
その後お礼の手紙が届き「熊本地震では、貴施設より忙しい中にもかかわらず、たいへん温かいご

支援を頂き、本当にありがとうございました。ご利用者様を中心に千羽鶴を折って下さったことに利用者、職員共にとても感動いたしました」という内容の手紙を頂き、当施設の利用者様も喜びや感動など大きな反響があった。又西原町の広報誌にも掲載された。

③ カゴ 鉛筆立て作り

募金活動を目的としチラシでのカゴ作り、折り紙での鉛筆立てを製作し、敬愛園祭りにて販売する。

製作期間（平成28年6月～平成28年8月）

参加者 女性利用者様 18名 男性利用者様 10名

カゴ 60個 鉛筆立て 90個製作

平成28年10月 西原町社会福祉協議会へ売上金
¥5,077円を寄付、その後感謝状を頂く。

【考察・まとめ】

最初は「できない」「興味がない」等と無関心だった利用者様や、職員が「この方は無理だろうなー？」と一方的に決めつけていた部分もあった。しかし職員や利用者様同士での声掛け、誘い合うことによって、参加者も徐々に増えてきた。

利用者様にはそれぞれの役割があり、「布を切る、縫う」「糸を通す」「ニスを塗る」「家に持ち帰り行う」、等と一人一人の出来る事が繋がり、多くの作品を完成させる事が出来た。

又全作品において、一つの工程しか出来なかったのが、次の工程まで行えるようになり、最終的には一人で作品を仕上げるまでになった。

完成後には「子供達は喜んでくれた？」「熊本に送った？」「作品はちゃんと売れたかな？」などと自分達で作った物が誰かの役にたっているのか、と心配しながらも、作品を作る事で社会との関わりを持つ事ができ、達成感を味わっている様子がみられた。

多くの利用者様が一つの目的に向かって作業を行う事で、意欲向上にも繋がり、その後も「何かやる事ないの？」「孫に作ってあげたいさー。」「友達にプレゼントしたい。」との想いで継続して作品作りを行っている。

【今後の課題】

女性利用者様の中には作品作りに集中しすぎて、頭痛やめまいを訴える方もいた為、職員が時間配分に配慮する必要があった。

又、男性利用者様の興味をひくものが少なく参加に繋がらなかったため、今後は男性利用者様の声を聞き、参加できる作品作りを課題として、取り組みを継続していきたい。

トイレでの排泄に向けての支援

～笑顔が増えたね！「チャーガンジュウ！！」～

施設名：介護老人保健施設 友愛園

発表者：中村 秀史

共同研究者：喜多 友明

【はじめに】

今回尿道留置カテーテルを抜去を行い、オムツ使用からトイレでの排泄へ移行しQOLが改善した事例について報告する。

【事例紹介】

- ・92 様 女性。 要介護 2
障害自立度 B 2
認知症自立度 II b

平成 26 年 1 2 月

- ・自宅で転倒され右大転子部骨折のため入院術後に尿閉があり、神経因性膀胱と診断。尿道カテーテルを留置する。
平成 27 年 1 月
- ・リハビリ目的のために転院され、身体機能の向上は見られたが、神経因性膀胱による尿閉は尿道カテーテルを抜去し内服薬と導尿にて経過観察となっていたが改善が見られないため尿道カテーテル留置を開始となる。
平成 27 年 5 月
- ・入所当初、本人から「恥ずかしい。」との声からリハビリスタッフの提案により尿道カテーテル抜去が可能かカンファレンスを行った。入院時の臀部ビランの悪化とトイレでの排泄ができる機能面での不安があることで見送りとなった。
平成 28 年 5 月
- ・広域連合の介護相談員より、ご本人から尿道カテーテル抜去の希望について報告があり、にてカンファレンスを行う。
その後、担当者会議にてご本人とご家族へ心身状況の報告と本人の希望を確認する。
ご家族としては本人の希望に寄り添いたいとの意見が聞かれ担当者会議後、尿道カテーテルの抜去に向けて計画立案をたてる。
平成 28 年 6 月
- ・尿道カテーテルを試験的に抜去。
- ・評価期間として1週間、1日1回の残尿測定で、平均残尿は10mLから30mLという結果であり、トイレにて排泄、排便確認ができたため測定を終了とした。

尿道カテーテル抜去直後はご本人の精神面で尿失禁への不安感が強く頻回にトイレに行かれたり、食事や水分摂取量を自ら控えたりする様子があったため、全職員で本人の気持ちに寄り添い、思いを共有し、ご家族と一緒に精神支援のアプローチとして安心感を持って頂く声掛けや励ましの声掛けを行っていった。その後は排泄の失敗も殆どなく、日中のトイレが定着した。

【考察】

- ・日中トイレで排泄を行い、以下の変化があった。
- ・移乗動作のADLの向上
- ・食事摂取量の増加
- ・定期的下剤のみで排便コントロールができるようになった。
- ・本人の好きな歩行訓練が人の目を気にすることなくできるようになった。
- ・羞恥面での改善があることで自ら声をかけるなど、他者との交流が増えた。
- ・職員からの声かけで行動する受け身の生活から本人の意思で行動する生活になった。
- ・トイレで排泄をすることによって、できることが増えて自信がつき、日常生活が豊かになり、笑顔が多くみられるようになった。
- ・多職種が本人の身体的・精神的負担を軽減するため気持ちを共有し、傾聴を心がけカンファレンスを重ね、実施したことが上記の結果に繋がったと考える。

【まとめ】

- ・今回、トイレでの排泄へ向けての取り組みを行い、精神的にも前向きになり日常生活も大きく変化がみられた。
- ・ご家族との交流の場が増え外出支援・外泊支援に繋がるアプローチへの大きな一歩を踏み出せるきっかけになった。
- ・本人が意欲を持って取り組む事の大切さに改めて気付かされた。職員も利用者様の潜在的なニーズを汲み取れる視点を持ち合わせて、これからのケアに努めていきたい。